

## 巻 頭 言

校長 景 山 三 平

いよいよ国立大学の独立法人化がスタートする。広島大学では、「世界トップレベルの特色ある総合研究大学」を到達目標として、その実現に向けた教育研究活動が展開される。このことには附属中・高等学校も同様に対応しなければならない。それは「広島大学附属学校」としての特色を活かし、全国的な中等教育の範となるべき教育機関として、基礎的・先端的教育活動を実践し、大学と連携した教育実践研究、及び学生の教育実習の場としての役割を果たし、かつ、これらを生かした社会貢献を実現することが、強く求められている。

我々は日々の教育実践や教育実習指導等の諸活動の中から、自身の問題意識の下でアカデミックな価値観に方向づけられた研究テーマを見出し考究し、その成果の一端を研究発表として表現している。そこでの論文としての発表形態を考えてみると、自分が興味をもっている分野の教育研究雑誌、自分が属している学会の機関誌、広島大学学部・附属学校共同研究機構の研究紀要、附属中・高等学校の研究紀要、での発表、他にも、教育関係図書や商業雑誌等での依頼原稿での発表もある。どのような発表の場を利用するのかは、著者の価値観、論文の質など色々関係するが、いずれにしても、論文として自分の研究成果を世に問う姿勢は、高貴なもので、独法化するこれからは更に全構成員にこの姿勢が求められるものである。種々な場での活発な論文発表を期待したい。

本研究紀要は附属中・高等学校が発行するもので、その執筆要項には、本校における教育実践・研究の成果を発表するものと位置づけられ、中等教育の発展に資する研究論文、実践記録であることと明記されている。この研究紀要は、実質 1953 年の創刊から始まり、今回で半世紀になる。本号には 7 編の論文が単著 5 編、共同 2 編で寄せられている。教科別に見ると、国語・書道 2 編、数学 2 編、保健体育 1 編、音楽 1 編、家庭 1 編であった。本校の使命の一つである教育実習活動にスポットをあてた興味深い考察もある。今回の 7 編という数字は決して多くはない。ちなみに、過去 5 年間の掲載論文数は、46 編で、その内訳を教科別に見ると、国語 4 編、社会 8 編、数学 13 編、保健体育 3 編、音楽 3 編、書道 2 編、英語 3 編、家庭 3 編、情報 2 編、その他教科横断型のもの 5 編であった。年平均 9 編となる。多くは単著であるが共同執筆も見られる。単独研究を決して否定するものではないが、昨今のように多忙な環境の中では、共同研究というスタイルを視野に入れて考究の質を上げ、仕上がりスピードアップを図る方法も考えても良いのではないかと考えている。この方法の良さに研究成果をフロアーに還元しやすいという点が上げられる。教育分野においては、研究のための研究ではほとんど意味はない。諸理論の教育実践化考察や教育実践を視野にいれた理論構築が求められている。このためにも共同研究という方法は有効と考えたい。

このささやかな研究紀要が、教育関係者に対して多くの情報や大きな示唆を与え、意見交換を触発して教育研究と実践に寄与することを念願する次第である。